

しよう。しかし、留意せねばならないこ

とは、カナディアン・ロッキーマンをもつて、カナダのすべてを判断したりすることに

もなりかねないということである。事実、日本人は、カナダを「logs & rocks」の国としか見ていないという、カナダ側の批判

さえある。また、日本の観光客をもつて、カナダ人が日本を誤まつて推し量ること

もないとはいえない。さらに、観光客による交流のひき起す不幸なケース（たとえば、極東やパリで問題を起したようなケース）も発生しないとはいえない。

日本とカナダとが相互理解を深めるために、もっと適切なシステムが是非とも検討されるべきであろう。たとえば、市民ベースの交流を支援するような政府間制度が、もっと充実されるべきである。

また、カナダ各地に生活している約四万人の日系カナダ人の協力をもつと得るべきであろう。日本国内にいる彼らの血縁者

も含めるならば、それは、日本とカナダを結ぶ大きなパイプとなるはずである。

また、産業界も、単なる資源手当や貿易取引といった見地からではなく、もっと長期的な視点からの交流や両国の相互理解のために尽力するべきであろう。

日加関係の歴史は、すでに百年を超えている。一八七三年、カナダ・メソジスト・ミッションが来日、布教に加えて、

日本の慈善事業や近代教育に大きな貢献を与えたといわれる。この日本とカナダ

のはじめの出会いが、極めて文化的、創造的であったことは、その後の、さらにこれからの日加関係のあり方を象徴し

ているように思われる。

日本からの最初のカナダ移民、永野万蔵がビクトリア港に上陸したのが、一八七七年であった。ブラジル移民が始まる三十年前である。ここにも、日加関係の

深さがある。一九二九年、日加双方に公使館を開設し、国交を開始する前に、すでに日加関係は始まっていたのである。

日加関係の新しい役割

最近、日加関係はますます充実したも

のになりつつあるように思われる。しかし、日加関係は、単に日本やカナダの利益だけの視点から考えてはならないこと

はいうまでもない。とくに、平和を指向する中堅国家である両国にとって、その

積極的協力関係の強化は、世界的な視野から考える必要がある。そして、それがまた、開かれた経済構造をもつ両国にとつても、必要なことなのである。

近代西欧が指導してきた、現在の工業文明は、今、大きな壁にぶつかっている。工業化を支えてきた安価な資源は少なく

なり、一方、環境面からの制約も強まっている。さらに、南北問題にみるように、世界の経済構造は不安定化しつつある。

これまでの経済社会パラダイムを超えた、新しいレジーム、新しい文明の創造が必要になってきているのである。

日加関係の新しい役割は、まさにこの点に求められるべきである。今こそ、両国の積極的協力によって世界を動かす時

ではないであろうか。

カナダは、新しい世界に向けて二つの実験をしているといわれる。第一は、自

然と機械文明との積極的調和への模索で

ある。アメリカ文明と自己を画するとい

う意味もあって、自然保護に対する関心は極めて高いようである。第二は、多様な文化の共存と統合を目指す新しい文化

への模索である。これらの点で、若者の果たしている役割は極めて大きい。首相の年令が四十才

まさにカナダは若い国であるといえよう。カナダこそ若者の新しい巨大なコミュニ

ンの成立しえる平和と愛とやさしさにみちた国という見方もある。多様な価値観

が共存し、それぞれが自己を主張しはじめた現在の世界において、カナダの試み

は評価されるべきである。日本もまた、先に述べたように、寛容な社会である。

平和と愛とやさしさも、日本にとっては重要な社会価値となっている。日本の英知とカナダの勇気が結びつくことによつて、新しい文明への道が開かれることは、決して不可能ではあるまい。

自然との調和に関していえば、これも日本が追い求めてきた価値観である。近代工業化の過程で、やや道はずしたと

はいうものの、日本人の知恵として、そ

〈佳作〉

うま

美し北の国カナダ

山田徹

(在モントリオール)

これは内部化されているといつてよい。カナダの豊かな自然を、世界のためにうまく活かしていくことは、日加関係の協力の大きな目標となるべきであろう。日本

のもつ工業技術や自然力の有効活用技術が、積極的に活かされるべきである。たとえば、最近、注目されているソフト・

エネルギー・パスのような行き方は、日加の協力によって、つまり、カナダの資源と日本の知恵によって大きく前進する

のではないかと思われる。

以上のような認識のもとに、日本、カナダ両国は、個人レベル、産業レベル、さらに国家レベルで、積極的な協働関係を強化していくことが望ましい。さらに、

そうした日加関係が核となって、協力の輪が広がっていくならば、日本とカナダ両国にとっては大きな喜びといふべきであらう。

世界の歴史は、大きく回りつつある。そして、その中で日本とカナダの役割は、極めて大きいことを、我々は銘記すべきである。

た。夢想さえしなかったことである。しかし七十年の生涯をいま振り返つて

いかなる不思議な宿命か、古稀の年になつて、昨秋私は遙々カナダに居を移し

た。夢想さえしなかったことである。しかし七十年の生涯をいま振り返つて

いかなる不思議な宿命か、古稀の年になつて、昨秋私は遙々カナダに居を移し

いかなる不思議な宿命か、古稀の年になつて、昨秋私は遙々カナダに居を移し